

誰かが、動かなければならない

2018年の秋、北海道を襲った震度7の地震は、町の景色を一変させました。山肌は崩れ、家々は傾き、そして無数の墓石が倒壊しました。ニュースでは、「ご先祖様の骨壺が剥き出しのまま」という映像が流れ、私は胸を締めつけられる思いで画面を見つめていました。

「誰かが、動かなければならない。」そう思った私は、石材業の仕事の合間を縫い、クレーン付きトラックに工具を積み込み、たった一人で北海道へ向かうことを決めました。11月の風は冷たく、北の大地には初雪が舞っていました。

到着した現場には、言葉を失うほどの光景が広がっていました。墓石は根元から倒れ、割れ、土台ごと砕けているものもありました。親族を亡くした人々が、ただ呆然と立ち尽くしていました。私は声をかけ、手を合わせ、ひとつずつ、黙々と墓石を起こしていきました。

1日1件、多くて2件。それでも1週間で11軒の墓を修復することができました。

そんなある日、一つのお寺を訪れました。そこも崖崩れにより墓地全体が損壊し、住職の墓石までもが崖下に転げ落ちていました。私は住職に声をかけました。

「ご住職の墓石も、何とかしましょうか?」、すると住職は、穏やかな笑顔で首を振りしました。

「私の墓は大丈夫です。それよりも、檀家さんの墓石を先にお願ひします。困っている人を助けてやってください」。その言葉に、私は胸が熱くなりました。自分のことより他人のことを思う。

まさに「奉仕」の原点がそこにありました。住職のその一言が、冷たい風の中で私の心に深く沁み込みました。

夜になると、震災で灯りの少なくなった町に静けさが広がりました。作業を終えた私はトラックの中で簡単な食事をとり、時おり外に出て満天の星空を見上げました。倒れた墓石を元に戻しても、完全に元どおりにはならないかもしれません。それでも、手を合わせることでできる場所を取り戻してあげたい。その一心で、翌朝もまた工具を握りました。

1週間の活動を終え、フェリーで山形へ帰る夜。港には、私が修復を手伝った方々が何人も集まっていました。時計の針は23時を回っていましたが、皆、手を振りながら「ありがとう」、「また来てください」と声をかけてくれました。

その瞬間、私は涙があふれて止まりませんでした。職業を通じて、誰かのために力を尽くすことができた。それが、どんな言葉よりも深い「幸せ」でした。それから数年が経ちましたが、あの時出会った人々とは今も季節ごとに便りを交わし、果物やお米などを送り合っています。震災という悲しい出来事の中で、確かに生まれた「人と人とのつながり」。それは私にとって、何よりも大切な宝物となりました。あの北海道の冷たい風と、住職のあたたかい言葉を、私は今も忘れることができません。